

「顔身体学」領域主催公開シンポジウム

顔認証倫理

3月12日(土)
10:00~12:30

参加費無料・要参加登録

デジタルリスクと その克服

参加申込み

参加をご希望の方は
右のQRコードより
参加登録をお願いします。



<https://forms.gle/dqAsD11ecPTgECTs6>

会場: 秋葉原UDXカンファレンス A+B / オンライン

東京オリンピック・パラリンピックでは、不審者を発見するために一部の防犯カメラで顔認識技術を活用しようとして、新聞の問題指摘を受けて取りやめとなった。しかし、指名手配中の容疑者や不審者を対象にした運用は続けられている。いくつかの国は、顔認証システムを使っての国民を監視するシステムを強化しており、他方、欧州などでは原則禁止が打ち出され、SNSでの顔認証の使用についても批判が盛んになされている。また、AIによる顔認識がリアルな顔をデータとして使った場合には、サンプルが偏ることからAIの顔

認識が人種差別を生み出す技術となってしまうことについての懸念もしばしば指摘されている。

顔を認証するテクノロジーは、どのような形で人間社会に奉仕すべきなのか。それ以前に顔とは、一体誰のものなのか。それを自分の制御下に置くプライバシーとは何を意味するのか。マスクをかけ続けているコロナ禍において顔についての私たちの意識もまた揺れている。本シンポジウムでは、顔認識におけるテクノロジーと、その開発使用に関わる多様な倫理的問題、最終的に顔と身体の倫理性について考察したい。

プログラム

- | | |
|-------|-------------------------------------|
| 10:00 | 久木田水生 (名古屋大学): 顔認証と監視の倫理 |
| 10:30 | 林隆介 (産総研): AI技術を使った認知科学研究とその倫理の観点から |
| 11:00 | 河野哲也 (立教大学): コメント |
| 11:10 | 山口真美 (中央大学): コメント |
| 11:20 | 休憩 |
| 11:30 | 登壇者の相互討論 |
| 12:00 | 原島博 (東京大学名誉教授): コメント (オンライン) |
| 12:15 | 原島先生への質疑と総合討論 |
| 12:30 | 終了 |

開催方法

会場・オンラインのハイブリッド開催。
会場にご参加の場合は、イベント当日のご登録も可能です。

秋葉原UDXカンファレンス A+B

JR山手線・京浜東北線、東京メトロ日比谷線 秋葉原駅徒歩3分
〒101-0021 東京都千代田区外神田4-14-1
<https://udx-akibaspace.jp/conference/>



お問い合わせ

FACE & BODY kaoshintaicafe@rikkyo.ac.jp (担当: 佐古)

主催: 科研費新学術領域研究(研究領域提案型)
「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築: 多文化をつなぐ顔と身体表現」

「顔身体学」領域主催公開シンポジウム 顔認証倫理—デジタルリスクとその克服 登壇者プロフィール

くきた みなお

久木田 水生

2005年、京都大学大学院文学研究科で博士号(文学)を取得。2017年より名古屋大学大学院情報学研究科准教授。専門は技術倫理、技術哲学など。著書に『ロボットからの倫理学入門』(共著、名古屋大学出版会、2017年)、『人工知能と人間・社会』(共編著、勁草書房、2020年)、『学問の在り方—真理探究、学会、評価をめぐる省察』(共著、ユニオン・エー、2021年)など、翻訳書にアンディー・クラーク『生まれながらのサイボーグ』(共訳、春秋社、2015年)、ウェンデル・ウォラック&コリン・アレン『ロボットに倫理を教える』(共訳、名古屋大学出版会、2019年)、マーク・クーケルパーク『AIの倫理学』(共訳、丸善出版、2020年)などがある。



はらしま ひろし

原島 博

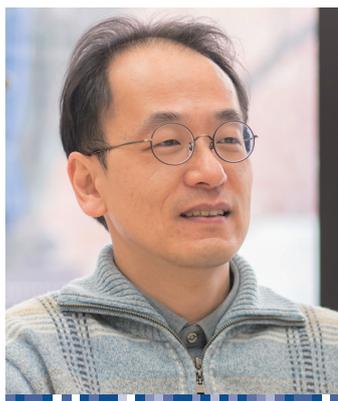
2009年3月に東京大学を定年退職。人と人とのコミュニケーションを技術的に支援することに関心を持ち、その一つとして顔学の構築と体系化に関わってきた。科学・技術と文化・芸術の融合にも関心をもち、定年後は女子美術大学(芸術)、明治大学(総合数理)、立命館大学(文学)の客員教授、古希を過ぎて東京大学に戻って2021年3月まで特任教授を務めた。これとは別に一般向けの個人講演会(HC塾)を東日本大震災の直後より毎月開いている。



はやし りゅうすけ

林 隆介

東京大学大学院工学系研究科計数工学専攻修了、博士(工学)取得。カリフォルニア工科大学研究員、マックスプランク研究所研究員、理化学研究所研究員などを経て、現在、産業技術総合研究所主任研究員。霊長類の神経科学研究とAI研究をとおり、脳における視覚情報処理の計算論的解明に取り組んでいる。脳と機械をつなぐブレイン・マシン・インタフェース開発やAI技術の認知科学研究への応用を目指している。



こうの てつや

河野 哲也

立教大学文学部・教授、博士(哲学)慶応義塾大学。日本哲学会理事、日本学術会議連携委員。専門は、現代哲学と倫理学、近年は環境問題を扱った哲学を展開している。「こども哲学」を、未就学児から高校生まで対象として、全国の教育機関や図書館で実践している。

代表著作:『現象学的身体論と特別支援教育』(北大路書房、2015)、『境界の現象学: 始原の海から流体の存在論へ』(筑摩選書、2014)、『人は語り続けるとき、考えていない: 対話と思考の哲学』(岩波書店、2019)、『じぶんで考え じぶんで話せる: こどもを育てる哲学レッスン・増補版』(河出書房新社、2021)など。



やまぐち まさみ

山口 真美

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達学専攻修了後、ATR人間情報通信研究所、福島大学生涯学習教育研究センターを経て、中央大学文学部心理学研究室教授。博士(人文科学)。日本赤ちゃん学会副理事長、日本顔学会・日本心理学会理事。新学術領域「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築—多文化をつなぐ顔と身体表現—」領域代表。著書に「こころと身体の心理学」(岩波ジュニア新書)、「自分の顔が好きですか?—「顔」の心理学」(岩波ジュニア新書)、「発達障害の素顔 脳の発達と視覚形成からのアプローチ」(講談社ブルーバックス)など。

